

シンフォギア feat. 奏でる鬼

Mak

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

シンフォギア装者・天羽奏はあの日死ぬ運命であった。

そんな絶体絶命のピンチを救ったのは「鬼」に変身する不思議な男性だった。

交わることの無いはずの二つの世界に縁が生まれてしまう。

そして、このお話はそれから二年後に本格的に動き出す・・・

目次

プロローグ	1
謎の男	6
変身	12
颯の鬼	18
変貌した戦姫	22
青くなる鬼、赤くなる姫	27
良い握手	32

## プロローグ

「Grandis babel zigurat edenall  
Emustolronzen fine el barral  
zizzl」

2041年 春。

壊滅的な被害を受けたライブステージの跡地で、槍を天に掲げ、少女が歌を唄い始める。

黄昏の空に、命を燃やし、身を滅ぼすしてでも敵を倒す呪いの歌が響き渡る。

「いけない奏ッ！ 唄ってはダメッ!!」

仲間である刀を持つ少女が必死に止めるよう呼びかける。

奇しくもその願いは叶ってしまう。

そして、これがこのお話の分水嶺だった。

「Gatrandis babble zi・・・ガハアッ!」

歌の二巡目に入ったところで少女は吐血してしまい、歌は途中で途切れ未完唱に終わる。

そして歌と共に高められていたエネルギーは離散し夕日に溶けてしまう。

その隙を観客である怪物たちは逃さなかった。

「しまッ！ グアッ!!」

怪物たちは体を槍上に変化させ少女に突進する。

怪物たちは彼女の体に触れた途端に炭となって崩れたが、少女の方もステージの壁の方へと吹き飛ばされ、叩きつけられてしまう。

槍は崩れ落ち、身に纏っていたオレンジを主体とした戦闘服は光と共に消え、純白だったステージ衣装は煤にまみれ、彼女の吐血で赤く汚れてしまう。

「ちくしょう……。 すまない……。 紛い物のあたしじゃあ……。 君を守る事が出来ないみたいだ……」

少女は語り掛ける。

激突した壁のすぐ横で胸から血を流し、意識朦朧としている自分より小さな女の子に声を掛ける。

「せめて……。 あたしの命に代えてでも君を助けてあげたかったな……。 あたし、妹がいたんだ……。 生きていくれてたら君と同年ぐらいかな……。 情けないお姉ちゃんでごめんな……」

少女は女の子に寄り添い、彼女を抱き寄せる。

既に抗う術を失い、2人が助かる道は完全に閉ざされていた。

そんな二人に、触れるだけで人を炭へと変える怪物、「ノイズ」が取り囲み、一斉に飛び掛かろうとする。

少女はせめてもの抵抗とばかりに、ほんの僅かな時間でも長く女の子が生き長らえるよう抱きしめ、庇うように怪物に背を向ける。

柄にもなく神を恨みながら……。

こんな不公平があつて良いのかと呪いながら……。

一回ぐらいあたしをエコヒイキしてくれたって良いじゃないかと……。

『キイイイイイン……』

爆発と瓦礫による喧騒の中、金属が共鳴しあう音が辺りを支配する。

それと同時に3枚のCDサイズのディスクらしき物が何も無いはずの空間から突如現れ、少女たちの一番近くに居たノイズを切り裂く。

『ピュ〜イ ピュ〜イ ピイツピイツピイツピイーツ』

『ウホアツ ウホアツ ウホアツ ウホアツ』

『ギューーンンンンンンン』

そして円盤はそれぞれ3体の獣へと変形し、その小さな体のどこにそんな勇気があるのか、自分よりも遥かに大きいノイズ共へと攻撃を開始する。

まるで少女たちを守るかのように……。

「……はははッ。 夢でも見ているのかな？ それとも神様のお使いか？」

「う〜ん？ どちらかと言うと鬼のおともかな？ 大丈夫かお嬢ちゃんたち？」

「ッー！」

自分たち以外誰も居ないはずの戦場に、中年と呼ぶには憚られるほど遅い体付きの男性が彼女たちの側に佇んでいた。

「お、おいおっさん！ どこから現れたんだッ!？」

「……君の方は大丈夫そうだな。 そっちのお嬢ちゃんの方は……早く手当しないと危ないな。 ……ったく！ あのお面ヤロウツ！ 鬼使いが荒いんだからなあ。 呼んだならちゃんと元に返せってのに」  
「質問に答えろッ！ いやそれより、ここは危ないッ！ 早く逃げてくれッ！」

少女の質問を無視し、男は状況を確認するよう少女たちと戦況冷静に分析する。

小さな獣たちの方は善戦していたようだったが、尽きることの無いその物量に、徐々だが劣勢に追いやられていた。

「どうやらあのバケモノを全部倒さないと助かりっこないって感じかな？」

「ノイズと戦うつもりなのかッ!? やつらには普通の攻撃は効かないんだぞッ! 頼むからこの子を連れて逃げてくれッ!」

「ん〜? 鷹たちの攻撃も効いているみたいだし大丈夫じゃないかな? 大丈夫、大丈夫! おじさんに任せなさいって! それに、こういう時の為に、鍛えてますから!」

男は人懐こそうな笑顔を少女に向け、敬礼のような挨拶を取ると、右腰にぶら下がっていた二つ折りになった何かをホルスターから取り外し、軽く振る。

すると二つ折りになったそれは一本の音叉となった。

『キィィィィィン……』

男は音叉を左手の甲に当てると再びあの共鳴音が鳴り響く。そして、それを自分の額へとかざすと男は蒼炎に包まれる。

「おっさんッ!!」

突然の発火現象に少女は驚く。

だが男は慌てることも声を出すことも無く、ただその炎に身を任せていた。

間もなくして炎が消え去るとそこに人はおらず、代わりに異形の者がそこには居た。

筋骨隆々の紫の体に紅い腕かいな、顔には歌舞伎役者のような隈取、頭部には2本の大きな銀の角を持つ異形が居た。

その姿はまるで……

「お、鬼ッ!？」

っ  
づ  
く



## 謎の男

わたし、立花響15歳はこの春から念願だった私立リディアン音楽院高等科に入学出来ました！

これも親友の小日向未来が勉強とか見てくれたおかげです！

わたしがこの学校に通うことを決めた理由はなんととっても大ファンのもーカルユニット「ツヴァイウイング」の奏さんと翼さんが通う同じ学校だからです！

奏さんはザンネンながら去年卒業してしまい、しかも芸能界を引退。

ツヴァイウイングも解散してしまいましたが、運が良ければ3回生の翼さんに会えるかもツ！

でも流石トップアーティスト。

入学して数日立ちましたが影すらも拝めません……。

そして今、私は未来と一緒に学生寮の近くの商店街に探索と今日の晩御飯の買い出しに来ているのですが、お好み焼き屋さんの前で男の人が倒れていたんですッ！

「ご馳走様でした。 いやゝすみません！ お店の前で倒れていたりなんかして。 無事家に帰れたら必ずお代はお支払いしますの〜！」

「お粗末様。 まったく頑固な子だね。 おばちゃんのおごりでも良かったのよ?。」

「いいえ、そういう訳にはいきません！ こんな美味しいお好み焼きをタダなんてバチが当たっちゃいますよ!。」

お好み焼き屋「ふらわー」のカウンター席を挟んで店主である妙齢の女性は成人済みと思われる若い男性と、近くにある女子高の生徒2人という些か奇妙な組み合わせの男女の接客をしていた。

この男性は先ほど本人が言った通り店の前で倒れていたところをこの女子たちに声を掛けられ、それに気づいた店主がとりあえず店の中に入れたところ、ただ空腹だったことが分かりこうやってお好み焼きを振舞っていたのだ。

「そっちの二人もありがとうね！ 本当助かったよ！ 何かお礼したいけど、……あ！ もし手伝えることが有ったら言つてね！ これでもバツチリ鍛えているから箆笥ぐらいなら運んであげられるよ!。」

「い、いいえ結構です……。」

「しかしまあ、凄い量食べましたね!? 流石男の人……。 わたしも食べる方ですけど流石に敵わないなあ。 でもお兄さんどうしてお店の前に倒れてんですか？ お金が無いのは分かりましたけどおサイフを落としちゃったんですか?。」

「こら響。失礼だよ！ それに張り合ってどうするの？」

「別に張り合っていないよ。それに気になるじゃん。わたしで助けられることなら助けたいし」

「別に気にしてないよ。実はね、サイフは有るんだ。と言っても現金は入ってないんだけどね」

そういうと尻のポケットから和柄の財布を取り出し見せる。

「ならキャッシュカードくらい持ってるのでは？」

「うちはクレジットカードも電子マネー決済も受け付けてるよ？」

「それがね、確かに持っているけど何故か全部使えないんだ。倒れる前もそのコンビニで確かめたけどエラーが出ちゃってね。しかも携帯までつながらないというこの運のなさ、ちよつと呪われてるかも」

「それは大変でしたね」

「それよりも大変だったのがこれに気が付いたのが静岡だったんだよね。奈良からバイクで帰る途中だったんだけど、ガソリンがなくなっちゃってさ、高速降りてガソリン入れようとしたらカードが使えなくてね。仕方ないからコインパーキングに停めて東京まで走ってきたんだよ。途中で迷って一晩掛かっちゃったけど」

「飲まず食わずにですかッ!? ほえく大変そう」

「まあね。でも職場も直ぐ近くだからあとひと踏ん張りつてところかな?」

「お兄さんって働いているんですか? てつきり大学生かと……」

「ソウキで良いよ。生まれは1999年の21歳。彼女募集中! なんてね!」

「ほえ?」

空気が固まる。笑っていいのか、この男の言った意味と意図が分からず返答に困った3人の女性が固まる。

「それじゃあ、俺はこの辺で。あ、そうだおばちゃん。一応仕事場の名刺と俺の免許証を置いて行くね。今日中にはたどり着けるだろうから直ぐにお代持つてこれると思うけど、もし来れなかったら其処に連絡して。そんじゃあ、ご馳走様!」

内心スベったかな? と思いつつながら男は名刺をカウンターに置き、店をあとにする。

残った女性陣は茫然とそれを眺め、互いに顔を突き合わせ、誰も居ないのに小声で話し始める。

「ねえ未来。今日って何年だっけ?」

「……西暦2043年の4月」

「1999年って何年前？」

「44年前ね。あの男、23歳もサバ読んだことになるわね」

「逆サバですけどね。でも何のために？」

「……わたしたちをびっくりさせてその隙に食い逃げとか？」

「証拠も置いて行ったの？」

3人は男が置いて行った免許を確認し始める。

「名前は園田宗吾。ってッ！ ソウキなんてどこにも無いじゃないですかッ!? もしかして名前も嘘ッ!？」

「落ち着いて響。生年月日は平成11年2月14日生まれ。ねえ、おばちゃん？ 平成11年って西暦何年？」

「……私が平成2年生まれの1990年だから1999年ね。あの男は怪しいけど免許証も本物ね。その割には真新しいけど」

「あのお……、偽造とかの可能性は？」

「見た感じは本当に若いあの子に偽造なんて出来るのかしら？ だとしたら中々精巧に作ってあるわね。……あなた達平成が何年までか知ってる？」

「え、えつと……」

答えられず頑張つて計算しようとする令和9年生まれの二人。

「答えは平成31年までよ。でも見て、有効期限が平成32年になつているの。この時はまだ元号が決まっていなかったからこの表記で合っているわね。態々こんな細かいところまで作りこむ必要があるのかしら？」

再び沈黙する3人。

そして埒が明かないと名刺の方を確かめ始める。

「えっと何々？ 甘味処「たちばな」。住所は東京都葛飾区柴又6―39―8。とりあえずおぼちゃんに電話してみてください。わたしたちはスマホで検索してみます！」

結果、名刺に書かれた甘味処「たちばな」の電話は不通、ネット検索や住所検索してもそのような店は存在しないことが分かった。

## 変身

「ノイズ、全て殲滅を致しました」

『こちらでも確認した。　ご苦労だったな翼』

立花響が「ソウキ」と名乗る男を助けたその晩、リディアン音楽院からそう離れていない山中にて、爆発により発生した炎により煌々と赤く照らされながら、機械めいたスーツを身に纏う青色の長い髪の少女がそう告げる。

「司令。　今日奏は？」

『彼女も別地区に現れたノイズと戦闘中だ』

「でしたら直ぐに支援に行かせてください」

『不要だ。　こっちも、もうすぐ決着が着く』

「ですが・・・」

『お前の気持ちは分かる。　だが心配するな、ノイズの量も少ないし、今の彼女でも問題ないと俺が判断した。　君はこのまま本部には戻らず学院の寮に戻りたまえ』

「・・・承知しました。　風鳴翼は準待機に入ります」

通信が切れた同時に少女が身に纏っていたスーツは一瞬輝くと同時に学院の制服姿へと変わる。

そして、学生寮へと帰還するために踵を返す。

「・・・奏。　何時になったらあなたに会えるの？」

届きたい相手の耳に届くことも無く、寂しそうに吐いた言葉は夜風と共に流れていった。

彼女にとつて奏という少女は共に【ツヴァイウィング】というアイドルユニットを組む仕事仲間であり、戦場を駆け抜ける戦友であり、何より異なる二つの舞台へと臆病な自分を引っ張ってくれる大切な

相棒であった。

だが、2年前のあのライブが二人の関係を大きく変えた。奏が一方的に芸能界を引退したことにより行動を共にする時間は激減。

ノイズとの戦闘も本部の意向によりメインは翼、奏は広範囲、同時出現に備えての予備選力として運用すると決めたことにより、もう一年も直接会うことが出来ずにいたのだ。

彼女は知らない。

それは偶然ではないということ。

そして念願の再開が明日叶うのだということ。……

「はあっ！はあっ……！はあっ……！ シェルターから離れちゃったッ！」

日が暮れ始め、夕日が景色を橙色に染め上げる道を立花響は必死に走っていた。

憧れである風鳴翼の新譜を購入するべく放課後に街へ来てみれば、そこはノイズに襲われ、あたり一面に人だったものが溢れる地獄と化していた。

彼女一人だった場合はこれほど必死に逃げる必要はなく、既にシェルターに入れたはずであった。

しかし彼女は幼い女の子背負っていた。

その子はその街で母と逸れ助けを求めていたところ響に見つけられ、こうして背負われてきたのだ。

だが彼女は普通の女子高生、特別な訓練を受けた訳ではない。

そんな子に長いこと女兒を背負い続けて走り続けることが出来るはずもなく次第に体力は消耗し、遂には躓いてしまい地面に倒れてし



まう。

肩で息をし、必死に呼吸を整える。

倒れた体勢のまま遠くを見やれば半透明に揺らめくノイズの大群がゆつくりと、だが確実に自分たちを追ってきている光景が目に入った。

ノイズ。

それは異形のモノ。

半透明のその体は通常兵器を透過して寄せ付けず、逆にノイズが人間に触れば、人間をたちまちに炭へと変えてしまうというワンサイドゲームにしかならない不条理な存在である。

人類ではノイズに太刀打ちできない。

それが現代日本における公式見解であり、赤信号は渡ってはいけな  
いと同列で教わる常識でもある。

唯一の対応策は速やかに指定のシェルターに避難、遭遇した場合は  
一定時間逃げ続け、自壊するのを待つ、ただそれだけの怪物。

ゆつくりと迫りくるノイズに彼女の心にあきらめの気持ちが滲み  
出る。

『生きることをあきらめるな』

突如脳裏にあの日の光景が、あの言葉がよみがえる。

それだけで心の炉に火が灯り、再度少女を連れて逃げようとする。  
しかし、その判断は少し遅かった。

ノイズとの距離を確認しようと振り向くとノイズが数匹飛び掛  
かってきており、数秒もしないうちに触れてしまうほどの距離まで  
迫っていた。

これが別世界、天羽奏が死亡していた世界ならばもう少しだけ早く  
あの言葉を思い出し行動に移せただろう。

しかし、天羽奏は生存している。

この言葉が遺言かどうか、捉え方は彼女の自由だがその差が明確な  
違いを生み出す。

今にも触れてしまいそうなほどに近づいてきたノイズ。

「絶体絶命の彼女を救ったのは浅葱色の鳥、黄赤色の獅子、鈍色の蛇だった。」

「3匹の機械の動物たちはノイズに食らいつき、切り裂いてノイズを塵に変えていった。」

「お嬢ちゃん大丈夫か？　・・・って、立花ちゃんじゃないか？」

「・・・え？　たしか、ソウキさんですよ？　なんで？」

「説明は後で。見たことの無い魔化魍だけどここは僕に任せて二人は逃げなさい」

「だ、ダメですよッ！　相手はノイズですよ？　一緒に逃げましょうッ！」

「大丈夫！　これでもバツチリ鍛えているから！」

するとソウキは右腰にぶら下げていた二つ折りのナニカを手に持ち、手首のスナップを効かせて軽く振ることで一本の音叉へと変形させる。

その音叉はまるで二本角の鬼の顔の様に見えた。

ソウキはその音叉を左手首に打ち付ける。

すると『キイイイイイン……』と今まで聞いたことの無いような澄んだ純音が鳴り響く。

そしてそれを額にかざすとなんとソウキの全身が紫色の炎に包まれた。

「ソウキさんッ!!？」

余りにも突然の出来事に驚いてしまう響。

一方そのころ、ノイズの出現を感知したままでは良いが位置特定に手間取っていた特異災害対策機動部二課にも動きがあった。

「司令ッ！　突如アウフヴァッヘン波形に似たエネルギーを感知ッ！」

同時にノイズの位置を特定ッ！　謎のエネルギーと同じ個所で

すッ！」

「すぐに翼を出動させるッ！ 最短ルートを割りだ・・・」

「司令ッ！ 奏ちゃんからの緊急通信。 自分が出るから邪魔するなとのことですッ！」

「・・・翼、準備だ。 ただし命令あるまで出撃は許可しない」

「司令ッ！」

「命令だ」

（何故だ。 何故一緒に戦わせてくれないの・・・。 奏・・・）

「そ、ソウキさん？」

何分経つたのだろうか？ いや、実際には数秒も経ていないのだがそれだけ長く感じられるほどの衝撃だった。

謎多き青年が突如目の前で発火したのだから仕方ないと言えば仕方がない。

しかも青年はその事に驚きも恐怖せず、まるで精神統一でもしているかの様に静かに、静かに佇んでいるのだ。

身に纏っていた衣服は燃えてなくなり筋肉質の体が顕わになるが、なおも炎の勢いはより強くなる。

そして炎が完全に青年を包み込むほど強く燃え滾り人影だけとなったその時、青年は音叉を持った右手を大きく振り払うと炎はたちまちに消えた。

しかし炎から出てきたのは青年ではなかった。

そこには身長2メートル、肌は艶のある黒色、紅い腕、目鼻は無く歌舞伎の隈取のような顔、なにより特徴的な銀色の2本の角を持つ異形が立っていた。

その姿はまるで・・・

「お、鬼ッ!？」

うろたえる響。

それに対し異形はゆっくりと振り返り、優しく語りかけた。

「鬼だよ。でも良い鬼さ」

## 颯の鬼

自分の目が信じられなかった。

緊急連絡を受けて、一番近いあたしが現場に来てみれば明らかに人じゃあない生物がノイズと戦っていた。

でも、あの姿は間違いない。見間違えるはずがない！

鬼だ！ あの時の鬼なのかは分からないけどそれ以外に考えられなかった。

でもこれはチャンスだと思えた。

あたしは……、まだあの時の礼を言えてない。

それに……、あたしには……、あたしにはあの力が要るんだッ！

絶対にその力の秘密を暴いてやるッ！

そう心に決めた彼女はサイドスタンドを蹴り上げて戻し、アクセルを全開に開き走り出した。

「なんだこいつら？ 結構脆いな」

ソウキはたった一人でノイズを素手で蹴散らしていたのだが、そのあまりの手応えの無さを訝しんでいた。

彼がいつも戦う相手は素手の攻撃で倒されるほどやわな存在ではない。

必ず専用の道具を使わなければ決して倒せない厄介な怪物なのだ。

かといって、素手でも倒すことのできる怪物の親とも違う。

ノイズは彼にとって完全に未知なる相手であった。

本来であれば適度に戦闘を切り上げ、対策を立ててから臨むのが好ましいのだが生憎場所は天下の往来であり、既に視界の届く場所から離脱したとはいえ、逃がした女の子の安全が掛かっている以上、彼に撤退の選択肢はなかった。

幸か不幸か、怪物は一撃で倒せるどころか、敵の体当たりを喰らっ

ても何故か攻撃してきた相手の方が崩れるという始末であり、物量差に関しては問題にならないレベルであった。

もちろん多少の衝撃はあるが、自動車にぶつけられるぐらいの威力で怯む彼らではなかった。

そうこうしている内にノイズは最後の一匹となり、戦いを終わらそうとするのだが、そこで不思議なことが起きる。

「あれ？ つこのお！・・・あら？ なんだ？ 色が変わったと思つたら今度は攻撃が当たらねーぞ？」

先ほどまでは一方的に効いていた攻撃が突如怪物の体をすり抜ける。

何度か攻撃を、パンチ以外にもチョップ、蹴りなども繰り出すのだが攻撃は全く当たらず、まるで霞を斬っているような手応えのなさだった。

(調子に乗りすぎたか？ さて、どんな手でくるんだ？)

内心反省しつつも攻撃の手を止め、距離を取って相手の出方を伺う。

次はまだ試していない術を使おうと腰に互い違いに備え付けられた短棒に触れようとしたその時。

怪物は突如攻撃したときの様に崩れ落ちたのだ。

「・・・なんだつたんだ？」

それは時間にして数分の出来事であり、あまりにも呆気ない幕開けであった。

「・・・とりあえず、もうこの辺にはいないぽいな。 さて、あの子は無事逃げられ、『ブオ〜ンッ！』・・・つお!? アツブナ!?? 何だっ

!?! 今度は何だ!?!」

辺りを確認し、取り逃しがないことを確かめっているとバイクがアクセル全開で彼の背後直ぐ近くを通り抜ける。

驚きながらもそのバイクの通った方へ振り向くとそこには、バイクでスライドしながら行うブレーキ方法、通称、金田ブレーキでこつちに方向転換し、ゆっくりと近づいてきたのだ。

「・・・あの時の鬼じゃない? まあいいや。おいッ! お前も鬼なんだろ? このディスクの持ち主を知らないかッ!?!」

同じくバイクを愛好家として、憧れの金田ブレーキを実際に間近に見れたことに感動し、少し呆けた彼に話かけてきたライダーは女の声だった。

出で立ちが女性にしてはかなりの長身。

オレンジ色のジャケットを羽織り、スキニーデニムが非常によく似合うほど脚が長い女性だった。

顔は残念ながらフルフェイスのヘルメットとミラータイプのシールドのため確認は出来なかったが、乗っているバイクもアドベンチャー系であり、どこことなくスポーティで快活、可愛いよりもカッコイイという言葉が似合いそうな印象だった。

だからこそ、さぞ美人で、一度会ったら忘れられなさそうな女性の手に、彼とその関係者のみしか持ちえない物を持っていることに驚きを隠せずにいた。

「それは・・・ディスクアニマル! なんで君が?」

「ッ! やっぱり知っているのかッ!?! 教えろッ!?! お前たちは何者だッ! どうやったたらあたしも鬼になれるんだッ!?!」

矢継ぎ早に質問してくる謎の女。

ソウキの中で彼女に対する警戒度が跳ね上がる。

だがしかしこのまま放置する訳にもいかず悩んでいるところから然程遠くない工場密集地帯から謎の光の柱が立った。

「あれは？ そう言えばあの方向はあの子たちが逃げた方向！ 君！ 済まないが後で話そう！ そので待っててくれ！」

「お、おいッ!? 待てーッ！」

嫌な予感がする。

そんな気持ちを胸にソウキはその強靱な健脚で建物伝いに最短距離で走ってゆく。

それはまるで颯はやてのように。



## 変貌した戦姫

(やはり。信じ難いけれどもあの子が身に纏っているのは間違いなくシンフォギアシステム。しかも GANG ニールだなんて……この子、奏とどういう関係なの?)

出撃待機を命じられた風鳴翼であったがその命令はすぐさま別箇所が発生したノイズの出現の報せにより解除され、直ちに現場に急行するよう命じられたのだ。

自前のバイクで現場に急行する際中、精神を集中させ、戦の前の準備を行っている途中で聞いた報告が彼女の心を乱す。

なんとノイズの出現地に GANG ニールのアウフヴァツヘン波形が検知されたのだ。

奏が予定を変更してそちらに向かったのかと思っただが詳細によれば奏は予定通り例の場所に到着しており、先ほどの謎の波動の件も含め計器の誤作動が疑われた。

しかし現場に来てみればそこに居たのはシンフォギアを身に纏い、幼女をノイズから守るように抱きかかえている、立花響がいたのだ。

早急に殲滅し、たつた今巨大なノイズを始末した巨大な剣の上から彼女の様子を観察していた。

(この娘……奏とどういう関係なの? 問いたださなければ………ん? しまったッ!?)

だがここで翼は一つのミスを犯してしまふ。

実はまだ小型とは言えノイズが物陰に潜んでいたのだ。

それはあまりにも彼女らしくらぬミスだった。

とは言え仕方ないと言えるだろう。

あまりにもイレギュラーなことが多すぎたのだ。

なによりも、自分の知らない女が、奏の力をなぜ持っているのか、<sup>GANGLニール</sup> どういう関係なのか……。

その感情は嫉妬なのか、それとも淋しさからなのか……。

物陰のノイズが響くと少女に飛び掛かる。

それに気が付いているのか翼だけだったが不幸なことに距離が開きすぎていた。

ノイズが密かに彼女達に触れそうになったその瞬間、建物の間から人影が飛び出し気合の声と共に一つの火の玉が飛んでくる。

「おりゃ!!」

「うわあッああっ!!」

その攻撃には気が付き驚く響。

だがその火の玉は背後に居たノイズに見事命中し、ノイズは瞬く間に燃え尽きた。

これにより、最後のノイズは駆逐されたのだった。

「あれ? おつかしいなく? 今度はちゃんと攻撃が効いたよ? なんだだ?」

朱色で先端が丸みを帯びている棒を右手に持ちながらブツブツと独り言をつぶやく鬼。

そんな鬼に目を向けつつ、なんて反応して良いのか、しゃべり掛けても良いのか確認することも出来ない程響は混乱、また同時にこの謎の鬼に恐怖心を抱いていた。

そんなこっちの気持ちも知らずに、この鬼はまるで知り合いに話しかけるような気安さで話しかけてくる。

「やあ! 無事でよかった! ところでどうしたのその恰好? コスプレ?」

「え、えつとら、そ、ソウキ……さんなんですすよね?」

「あ! そうか、ごめんごめん! びっくりしたよね。 ちよつと待つ

て、今顔を・・・ッ！ ッブナ！ いきなりなにするんだ！」  
「問答無用！」

ソウキが何か動作を起こそうとしたそこへ翼が振った刃が彼と  
要保護者響と幼女の間を斬る。

その後も鋭い斬撃がソウキを襲う。

最初は何とか避けることが出来たが、休む間もなく繰り出されるその攻撃に何太刀か浴びてしまう。

「グウ！・・・フン！」

「ッ！ こいつ、傷が再生するの catt!？」

数メートル飛び退き、翼を警戒しながらもソウキが気合を入れると斬られた傷が忽ち塞がる。

警戒を強め、より強力な技を選択しようとする翼にソウキは語り掛ける。

「ちよつと待った！ 俺は怪しい者じゃない！ 剣を降ろしてくれ！」

「黙れ！ 魑魅魍魎の言うことなど信じられるか！」

「待ってくれ！ 俺は人間だ！ 今その証拠を見せる！」

するとソウキ一瞬姿が見えなくなるほど発光する。

光が収まるとそこには顔だけ人間に戻ったソウキが立っていた。

「あ・・・ やっぱりソウキさんだ・・・」

遠方で座り込んでいる響がぼつりと言う。

「ほらね？ だから刃を収めてくれ」

懇願するソウキ。だが彼女から返答は冷酷な物だった。

「・・・ならば余計に始末しなければ。貴方の存在は・・・有ってはならない！ 奏に気が付かれる前にこの世から消し去る！」

そう宣言すると翼は宙へと舞い、持っていた刃を巨大な物へと変化させた。

そして思いっきり振りかぶりそのままソウキを両断しようとする。

腰に据えた二本の棒を構え防御の姿勢を取るソウキ。

そんな二人の間に歌を唄いながら割り込んでくる影があった。

「Croitzalronzell Gungnir ziz  
z1」

その影は一瞬で響や翼と同様の体のラインがはつきりと分かる機械のスーツを身に纏い、手には巨大な突撃槍ランスを構え翼の攻撃を防いだ。

だが、やはり一瞬とは翼の攻撃が早かったのか、攻撃は影の変身完了よりも早く到達し、頭部に残っていたフルフェイスヘルメットに刃は届いていた。

『久しぶりだな、翼。しばらく見ないうちにまた強くなったみたいじゃねーか』

「か、奏なのツ!? ど、どうして・・・、あ、そ、それよりもッ！ わ、私・・・なんてことを・・・ツ!?!」

『・・・あー心配するな。攻撃はギリギリ届いてないよ。それより・・・コイツはあたしの客人だ。コイツに危害を加えるもんなら・・・』

すると被っていたヘルメットが真っ二つに割れ、中から彼女の顔が現れる。

「・・・容赦しない」

ヘルメット越しのくぐもった声ではなくなり、いつも聞いていた、  
ずっと聞きたかった彼女の声がやっと聴けた瞬間だった。

だが、そんな気持ちに離散するほど翼は絶句してしまう。

言葉ではなく、その姿に……。

長くウェーブの掛かった髪は自分で乱暴に切ったのかヘルメット  
から溢れない程度までに短くなり、翼が大好きだった赤い髪色もまだ  
らで濃淡が滅茶苦茶な汚い金髪に染めた、記憶とはかけ離れた、天羽  
奏がそこに居た。

## 青くなる鬼、赤くなる姫

「……………」

タイヤがアスファルトを蹴りつける音だけが車内に流れていた。

二課が所有する黒塗りのリムジンの後方座席に向かい合わせて座る奏、翼、響とソウキは一言も喋らず、気まずい雰囲気のままいずこへと運ばれていた。

しかしその気まずさは沈黙に対してではない。

この沈黙はちよつと前に発生したとあるハプニングによる結果でしかなかった。

奏が割り込んできた後から数分後、戦場となった工場敷地は見事な手際で封鎖され、あと処理が行われていた。

ノイズだったものは巨大な掃除機で吸い取られ、工場関係者だろうか？ けが人を運ぶ救急車も数台出入りし現場は忙しくも秩序の取れた行動がとれていたことは誰の目から見ても明らかだった。

もちろん、響が命がけで助けた女の子も駆けつけた男性隊員のジャケットを羽織りながら暖かい飲み物を啜つてにこやかな表情を浮かべていた。

そんな様子を満足げに見つめる響に、顔だけ人間に戻ったソウキが話しかけてくる。

「女の子、守れてよかったね。 お疲れ様」

「あ……、ソウキさん」

「君の勇気ある行動、尊敬するよ。 よく頑張ったね」

「えつと、その……えへへ。 ありがとうございます。 あ、ソウキさんッ！ ソウキさんも助けてくれて、ありがとうございますッ！」

人助けを趣味と公言する彼女ではあったが助けた人から直接言われることはあっても第三者から褒められる経験はあまりなかった。

それも年上の男性の知り合い自体が希少な彼女にとってその言葉はとてもくすぐったいものであった。

「いやいや、大したことしてないよ。自分に来ることをしたままで」

対してソウキの反応は平坦であった。まるで戦うことが当たり前であるかのようなその物言いにかねてから気になっていた疑問を響は投げかけようとする。

「あ、あのッ！ ソウキさんって一体・・・」

「あのお・・・」

「へ？」

「うん？」

二人に話しかけてきたのは紺色の制服に身を包み、両手に湯気が立ち昇っている紙コップを持った若く、紅い口紅が印象的な女性だった。

「あったかいものどうぞ」

「あったかいものどうぞ」

「すみません、いただきます」

時期は4月、すっかり冬の寒さは引いたが流石に夜はまだまだ肌寒い季節である。

素敵な笑顔と厚意が伝わるその気遣いに二人はあったかい飲み物を受け取り軽く啜る。

するとホツとしたからかなのか、ソウキの隣に居た響は突如淡く光りだし、未だ身に着けたままの機械。ほいスーツから一瞬で学生服の姿に変化する。

そのことに驚く二人。

驚きのあまりソウキは固まり、響は紙コップを落とす、よろめきな  
がら後ろに倒れそうになる。

そんな響を後ろから抱き留めたのは神妙な顔持ちの翼であった。

「あ、ありがとうございますッ！ 実は…翼さんに助けられたのは…  
これで2回目なんです！」

「……2回目？」

翼と響がやり取りをしている間、ソウキは静かに距離を取つてい  
た。

いくら彼が強かろうと、いきなり切りかかってくる人間に不信感を  
覚えるのは当然であり、その鋭い目つきには少々苦手意識を持つてい  
た。

「おい。 どこへ行くつもりだ？」

そんな彼を呼び止めたのは翼からの攻撃を防いでくれたバイクの  
女性だった。

ヘルメット着用していた時の第一印象に違わなかったがそのへ  
アーススタイルと目つきがどこかアンバランスにソウキは感じられた。

(勿体ない……)

不謹慎にも髪型をちゃんと整え、すこし荒れた肌を化粧で整えば化  
けるのにと考えていた。

「……なに人の顔見て黙りこんでんだ？」

「あ、いや…なんでもない。 それよりもさつきは助けてくれてあり  
がとう。 お蔭で助かった」

「気にすんな。 元々あんたには用があつたんだ。 悪いが、あたし  
らの本部まで来てもらう。 文句は言わせないぜ」

そういうといつの間にか彼の周りには大量の黒服にサングラスの男  
たちに囲まれていた。



そしてその中には頑丈そうな手錠に嵌められていた響の姿もあった。

「・・・確認したいんだが、あの子の安全は保証して貰えるんだよな？」  
「ああ。あたしらは別に非合法的な組織じゃない。そんな非人道的なことはしねーよ。あたしが保証してやる。まだ文句あるか？」  
「・・・いや、信用しよう。どっちかにせよ、俺も君に聞きたいことが出来たんだ」  
「ではとりあえず、早くその姿を解除して貰えませんか？」  
「・・・え」

後ろから翼が手錠を持って近づいてくる。

そのことは別に構わなかった。しかし彼女の台詞を聞いてソウキは重大なことを思い出したのであった。

「えつとあくと。その、このままじゃあダメでしょうか？」

「ダメに決まっています。戦闘形態を維持した者を本部に連れて行くわけにはいきません」

「それはその通りなのですがね・・・」

「なにか不都合でも？ なら無理やり切り？ がしましょうか？」

「待って！ 待って！ 俺死んじゃうよ！！ これ脱げないから！！」

「詭弁をツ！ あなたが一瞬でその姿になったのは分かっていますツ

！ やっぱり怪しい・・・ッ！ かくなるうえは実力で・・・」

「分かった！ 分かったから！・・・立花ちゃん、目を瞑っててくれない？ なにがあっても目を開けないでね？」

「えつと、はい、分かりました？」

訳も分からず目を瞑る響。

閉じた瞼も貫くほど強烈な光が感じられたがそれでも言いつけを守り、目を瞑り続けた。

しかし・・・

「……キャー……」  
「!!!!!!??」

翼と奏の、そして他にも周りにも周りにいた女性の悲鳴が聞こえ、何事かと思わず目を開いてしまった。

何が起こったか説明する前に説明をしておこう。

これは不幸な事件であった。

2種類のまったく異なるシステムという名の常識がぶつかり合ったが為に起こった不幸である。

戦姫たちが身に纏うスーツ、シンフォギアシステムはそのスーツを身に纏う際、着用していた衣類は自動的に格納され解除の際には自動的に元通りになる親切、いや、乙女が使用する物としては最低限の機能が組み込まれている。

一方、鬼の場合はスーツを身に纏うのではなく、自身の体を変化させたものである。つまり、衣類ではなく鬼そのものの肉体であり、有り体に言えば裸である。そして、変身の際に発生する膨大なエネルギーにより身に着けていた衣類は消滅してしまい、新たな衣服に着替えなければならぬ。

だが彼は緊急事態とは言えそのことをすっかり忘れていたのだ。予備の服は遙か静岡に置いてきたバイクと共に置き去りの状態である。

そのため、姫の方は自分たちの常識に当てはめて鬼に同様の武装解除を要求してしまい、鬼は後先考えず、孤立無援の状態であることも考慮せずに変身したのが事件の真相であった。

その結果が……、青い顔しながら大事なところを隠し、ベルト以外は全裸の変態的な格好をしたソウキと、耳まで真っ赤にして顔を手で覆っていた2人の姫たちの姿があった。

……ほどなくして、3人目の姫がその仲間になったのは言うまでもない。

## 良い握手

「あのくなんで学院に？」

気まずい車内での時間もようやく終わりを迎えようとしていた。目的地らしきところに到着し、全員が降車してみればそこはリディアン音楽院の校舎であった。

校舎の上部に設置された時計を見やれば、時間はもう既に夜の9時を周ろうとしている。

「へー、立派な学校だね。もしかして立花ちゃんって実はお嬢様？」  
「ふえッ!? い、いいえ……。しよ、庶民の家の出です……」

目的地に到着するまで続いた沈黙を最初に破った響の次に言葉を発したのは沈黙の原因の一人、急遽黒服たちがコンビニで買ってきたランニングシャツに、これまた黒服の予備のズボンを履き、裸足という奇妙な格好のソウキだった。

彼はあまりにも立派な、学校には見えないリディアンの校舎を令嬢たちが通うお嬢様学校と勘違いしたのだ。

そんな呑気な男に振り回される響。

過去に男性とそれほど距離の近い環境に無く、また、自身すらあまり女らしいと思っていない彼女にとって、一時の勘違いとはいえお嬢様扱いしたソウキに思わず動揺してしまう。

しかも相手は父以外では初めての大人の異性の裸を見てしまった相手である。

ただでさえ色んな事が起こりすぎている上にこの連続する謎イベントに彼女はすっかり疲れ果てていた。

ただでさえ重い手首に架せられた手錠がより重く感じられたのであった……。

ビジネススーツに優男の顔を乗つけた男性と2人の戦姫、天羽奏と

風鳴翼に先導され二人は教員たちが詰める中央棟なる建物の廊下を歩かされている。

何故このような場所に連れられているのか疑問に思っていると一基のエレベーターへと案内された。

「あ、ははははは〜」

乗り込むまでは普通のエレベーターだと思っていた二人。

エレベーターのドアとは思えるほど頑丈なつくりの扉が室内を閉めたと思えば床から手すりが見えり上がってきたうえに超高速で下降し始めたのだ。

突然のことに思わず愛想笑いが漏れる響。

対してソウキは顔にこそ出さなかったが心は彼女と同感であり、薄目を開けガラス面越しに映る金髪の女を見ていた。

(……俺に興味があると言ってたけど、本当はこっちの方かな?)

彼女の目線はソウキの右越しにぶら下げられていた音角をしきりに見つめていた。

彼女は一体何者なのか、なぜ鬼の事を知っているのか興味の見きな相手であることは間違いない。

すぐにでも聞き出したところではあったが、今はその時ではない。そう改めて思い至ったソウキはバレないように彼女の顔を見やる。何度見ても勿体ないと思うほど、どうにも目を離すことが出来なかった。

「ようこそ！ 人類守護の砦、特異災害対策機動部二課へッ!!」

そこは歓迎ムードと笑顔に溢れていた。

扉が開けばまず目に入るのは大柄と言われるソウキよりも2周大きい派手な赤一色のワイシャツの男と、その後ろに控える大人数の男女が満面の笑みで一行を向かい入れてくれたのだ。

そしていつ準備したのか、まるで元々別で予定されていた催事用ではないかと疑いたくなるような飾りつけ、食事、そして何故か開店やリニューアルオープンで見かけるような花輪の数々。

風鳴翼より事前にこれから向かう所は「微笑など必要のない場所」だと言われたためか、あまりの落差に響やソウキは勿論、身内であるはずの3人ですらも啞然としてしまっていた。

「さあさ、笑って笑って！ お近づきの印にツーショット写真を撮りましょッ！」

あなたは背が高いから屈んで屈んで——」

「い、嫌ですよッ！ 手錠をしたままの写真だなんて、きつと悲しい思い出として残っちゃいますッ!! そ、それにどうして初めて会う皆さんが私の名前を知っているんですか?」

「俺も同じ意見です……てかあの……、あまり触らないで貰えませんか?」

「ええ? ちょっとぐらい良いじゃない? 瑞々しいお肌、若いっていいわね」

固まっている二人の間に白衣の女性が入ってくる。

響の肩を抱き寄せ、スマートフォンで自撮りモードで写真を撮ろうとしたが彼女は飛び退き、ソウキはくすぐったそうに身を震わせていた。

「我々二課の前身は大戦時に設立された特務機関なのでね。 調査も

お手の物なのさ」

「……あッーッ!? 私のカバン!!」

手に持っていたステッキを花に変化させながら赤シャツの男が言う。

そしてその横にはいつの間にもやらソウキの側から離れ、白衣の女性が学生鞆を持って見せていた。

「……だが、そんな俺達でも君の経歴を調べることは出来なかった」

一瞬、ほんの僅かな一瞬。気づけたのは一握りの人間だけだろうか。

強烈な、今にも仕合いが始まってもおかしくない程の闘気をこの男は発したのだ。

勿論ソウキはその気当たりには気が付いていた。しかし、彼は特に行動には移さなかった。

若いとはいえそれなりに体と心を鍛えた彼には同じく体を鍛え、細かな仕草からも気品さを感じられるこの筋骨隆々の男に悪い印象を抱けなかったからである。

「だからこそ、俺の仲間や響君を助けてくれた勇敢な戦士である君自身の口からぜひ君自身の事を教えて欲しい。俺は風鳴弦十郎。こここの責任者をしている」

そう言いながら男はゆっくりと近づき、責任者自らソウキの手錠を解錠したうえで握手を求めた。

「ソウキと申します。本名は園田宗吾。名古屋生まれの二十歳。猛士と呼ばれるバケモノ退治の組織に所属する戦士、鬼です」

そう言い終わると双方は固い握手を交わしたのだった。